Journal of the Faculty of Management and Information Systems,
Prefectural University of Hiroshima
2016 No.8 pp. 163 - 175

研究ノート

広島神楽：再領域化の可能性

和　田　　崇・山　本　健　太

The Possibility of Re-territorialization of Hiroshima Kagura

Takashi WADA and Kenta YAMAMOTO

Ⅰ　はじめに－脱領域化と再領域化－

構造化理論を提唱するギデンズは，「伝統のもたらす安心感や（中略）長い間不動の「要害」であったものに係留された状態－西欧による支配－から解き放たれていった」ことを近代性の特徴とみて，「世界規模の社会関係が強まっていくこと」であるグローバル化をその帰結と捉えた（ギデンズ，1993）。また彼は，近代性のダイナミズムの源泉として，①時間と空間の分離，②脱埋め込みメカニズムの発達，③知識の再帰的専有，の 3 点を指摘している。①は「時空間が無限に拡大化していく条件であり，時間と空間が正確な帯状区分の手段」となることをいう。すなわち，前近代では場所によって異なる時間体系や暦を採用していたが，近代には正確な時計時間が普及し，時間が場所とかかわりなく均一化するとともに，通信技術の発達によって遠隔地間の相互作用が活発となり，空間的距離の克服が容易となる。②は「社会的活動をローカルな脈絡から「引き離し」，社会関係を時空間の広大な隔たりを超えて再組織化していく」こととされている。また③については，「社会生活に関する体系的知識の生成は，システムの再生産に不可欠な要素となり，社会生活を伝統の不変固定性から徐々に解き放していく」とみている。

さらに彼は，②によって，親族関係と地域共同体，宗教的宇宙観，伝統から構成される前近代にみられた「ローカル化された信頼」が解体し，人々は脱埋め込み化をとげた抽象的システムに帰属，依存するようになっていると断じている。また一方で，「脱埋め込み化を達成した社会関係が，いかにローカル固有な文脈なもの，あるいは一時的なかたちのものであっても，時間的，空間的に限定された状況のなかで，再度充当利用されたり，作り直されたりする」（澤，2010：136）再埋め込み化のプロセスが生じる。例えば，地域共同体における伝統的慣習が解体する一方で，地域固有の伝統文化が商品化されたりするように，「ローカルな文脈が他地域との関連性のなかで新たな意味を持ち，再び強化される」（澤，2010：136）状況はその典型であるとみることができる。

こうした脱埋め込み化と再埋め込み化の実態について，日本の地理学では，グローバル化が急速に進展するインド，とりわけインド農村の変容を捉えた澤らの研究がある（澤・南埜，2006：澤，2010）。彼らは領域（≒地域）に関する脱埋め込みと再埋め込みをそれぞれ「脱領域化」と

「再領域化」と定義し，インド農村がグローバル化によって，「農村文化やローカルな文脈に埋め込まれた「場所」を剥ぎ取り，経済的価値という上位の空間において価値判断される新たな意味を付与していくことにより脱領域化するが，同時にその変化過程もインド農村文化やローカルな文脈に再び埋め込まれ，インド農村は同時に再領域化」（澤・南埜，2006：143）したと述べている。

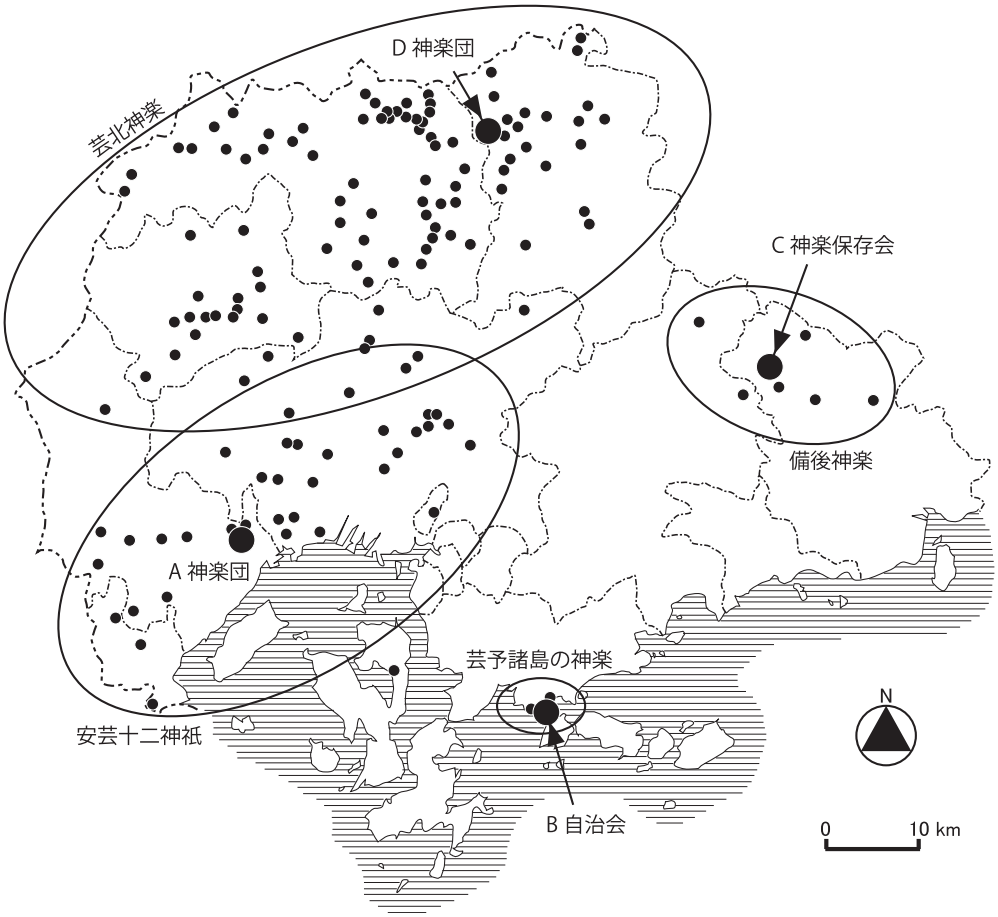
こうした脱埋め込み化と再埋め込み化，あるいは脱領域化と再領域化をめぐる議論は，それらが直接に言及されているわけではないが，伝統文化の変容を取り上げた地理学ほかの研究にも通底するものがある。八木（1994）によれば，かつての文化地理学は，前近代社会の生活様式や景観に残るその痕跡を意味に充ちた真正なものとして扱ってきた。しかし現代社会は，こうした民俗文化に常に修正や変形を加え，新たな意味や機能を付与するようになっている。民俗文化は資本によって断片化・商品化され，また行政や研究者らによって権威づけられたりする。これにより，民俗文化はそれを生み出した地域的・歴史的文脈から切り離され，新たな意味や役割を持つようになる。一方で，地域の伝統文化が商品化する過程で文化の真正性が歪められたり，喪失したりすることに対して，継承者が危惧やジレンマを感じており，そのような状況に対して時に抵抗したり，利用したりする状況も数多く報告されている（例えば，大城，1998：遠城，1998）。

本稿が取り上げる神楽についても，その脱埋め込み化と再埋め込み化，あるいは脱領域化と再領域化の議論に通じるいくつかの報告がなされてきた。例えば長澤（2009）は，早池峰岳神楽（岩手県）を例に，継承者は基本的には神楽の商品化を否定するものの，外部からのまなざしに応えて，神楽を神事から切り離したかたちで観光商品として提供し，外部（＝観光客）からの評価を得ることで，神事としての神楽を再活性化させるという柔軟な構造がみられることを指摘している。また高崎（2014）は，芸北神楽（広島県）を例に，地域のシンボルであり，住民にとっては生きがい，そしてコミュニケーション手段である神楽が，社会の変容過程で地域を離脱し，「広島神楽」として観光資源（＝商品）化するとともに，それが逆移入するかたちで地元の地域振興に利用される過程で，立場の異なる主体間でさまざまなコンフリクトが生じていることを報告している。

このように，伝統文化としての神楽は，外部のまなざしに応じるかたちで神事性や地域性を脱ぎ捨てて商品化が進み（脱埋め込み化，脱領域化），継承者を中心にその流れに危惧やジレンマを感じ，抵抗しようとする者がみられる。その一方で，商品化の過程で得られた外部からの評価をもとに神楽の神事性を高めたり，地域を振興したりしようという動き（再埋め込み化，再領域化）もみられるが，その過程で関係主体間にコンフリクトが生じることもある。

本研究は，以上を踏まえ，広島県西部を例に，脱埋め込み化，脱領域化が進みつつある神楽が，いかにして神事性や地域性を取り戻し，それによって神楽自体や所在地域の振興に結びつけること（再埋め込み化，再領域化）ができるのか，その可能性と課題を検討しようというものである。具体的に，農村集落の秋祭りで奉納される神楽を外部の者が鑑賞する行為を含む旅行形態（以下，奉納神楽鑑賞ツアー）の試行を通じて，その実施可能性を検討し，具体化に向けた課題を抽出した。奉納神楽鑑賞ツアーは 2014 年 10 月と 11 月に計 4 回試行し，同年 12 月に試行参加者による評価検討会を実施した（第 1 図）。

以下，Ⅱ章ではまず，広島県西部の神楽を概説した上で，近年の商品化（＝脱埋め込み化，脱領域化）の過程とその特徴を示す。続くⅢ章では，奉納神楽鑑賞ツアーの企画内容と試行結果を示す。その上でⅣ章では，広島県西部における奉納神楽鑑賞ツアーの実施可能性と課題を考察す



第１図　広島県西部における神楽団の所在地（2014 年）と試行ツアー訪問先

（各市町資料により作成）.

注：芸北神楽と安芸十二神祇の範囲（境界）はあくまで目安である。

る。Ⅴは論文全体のまとめであり，研究成果を要約した上で，今後の研究課題を示す。なお本稿では，脱埋め込み化と再埋め込み化，脱領域化と再領域化の用語に関して，澤（2010）に従い，領域（≒地域）に関する脱埋め込み化と再埋め込み化をそれぞれ脱領域化と再領域化と定義し，以下，それらを主に用いることとする。

Ⅱ　脱領域化する広島神楽

本稿が対象地域とする広島県西部[1]で神楽を継承する団体（2013 年）は 145 を数える[2]。これらの団体が継承する神楽はすべて同じというわけでなく，以下の 4 系統に分類できる（三村，2010）。芸北（げいほく）神楽は広島県に北接する島根県から伝播し，広島県北西部の山間地域に伝承される神楽で，現在も 100 を超える団体が継承している。安芸十二神祇（あきじゅうにじんぎ）は江戸時代に広島県南西部で発生し，今

1　具体的には，広島市を中心とし，同市と日常生活や経済活動の面でつながりが強い広島県西部と山口県東部の 17 市町が構成する「広島広域都市圏協議会」のうち，山口県の 2 市をのぞく 15 市町を対象とする。

2　各市町村資料による。

日まで神楽本来の目的や形式をよくとどめている神楽であり，約 30 団体が継承している。芸予諸島の神楽は江戸時代に愛媛県大三島から伝播し，沿岸部の集落に伝承する神楽であり，呉市の 3 団体が継承している。備後（びんご）神楽は江戸時代から広島県中東部に伝承される神楽で，三原市と東広島市の 7 団体が継承している。

これらのうち，近年，商品化，観光資源化が急速に進み，都市住民や観光客から高い人気を得ているのが芸北神楽である。芸北神楽は，発生時期の違いから，旧舞と新舞の二つに区分される。旧舞は，江戸時代から明治初期にかけて島根県から伝播した神楽をいう。これに対して新舞は，第二次世界大戦後に宗教色の強い旧舞が GHQ によって規制されたことから，安芸高田市の郷土史家が記紀神話に結びつく演目を演劇性・娯楽性の高い神楽に改変したものをいう。芸北神楽は歴史的には 4 系統の中で最も新しいものの，特に新たに創作された新舞において，悪鬼や大蛇を退治する勧善懲悪の単純なストーリーの演目が多いこと，速いテンポで舞うこと，衣装や演出方法が巧みであることなどから，外部の者から高い人気を得ている。

以下，芸北神楽の商品化の過程を，和田（2015）をもとにみていこう。芸北神楽を含む広島県西部の神楽は，その発生以来，各集落の神社で行われる秋祭りにおいて，集落の人びとによって奉納されてきた。しかし，第二次世界大戦後まもなく，広島県北西部の芸北地方を中心に，各地の神楽を披露しあう共演大会や，舞や太鼓，笛などの技量を競い合う競演大会が開催されるようになった。これらの大会（以下，神楽大会）は神楽所在地域の商工団体が主催するものがほとんどであり，この段階で神楽は集落の人びと自身のものから商工業者が振興の対象とするものへと変化した。

1970 年代になると，神楽大会は神楽団の所在する農村地域だけでなく，より多くの集客が見込める広島市中心部でも開催されるようになった。その嚆矢は芸北地方出身者が郷土芸能の伝承と普及を目的に開催した広島県神楽競演大会であるが，その成功を受けて，次第にメディア企業や小売業者，宿泊業者などが芸北神楽を上演する神楽イベントを企画，実施するようになった。これらのイベントは都市住民や観光者などの観客に芸北神楽のもつ伝統性と娯楽性をみせる興行的要素の強いものであり，この段階で芸北神楽は，農村でローカルに運営される大会で上演されるだけでなく，人口規模の大きい（＝集客力の大きい）都市で興行的に運営されるイベントで上演されるものになった。

さらに 2000 年頃からは，神楽の定期公演が企画，実施されるようになった。その嚆矢は 1998 年に始まった神楽門前湯治村（安芸高田市）の定期公演である。これに続き，2000 年代後半からは広島市中心部で次々と定期公演が企画，実施されるようになり[3]，人気と集客力のある芸北神楽はそのコンテンツとして積極的に活用されることになった。また，定期公演の開始にあわせて，それらの鑑賞をプログラムに組み込んだ旅行商品も企画，販売されるようになった。すなわちこの段階には，芸北神楽の地域振興あるいは観光・集客のコンテンツとしての活用がさらに進展，定着してきたといえる。

以上にみた広島県西部の神楽，とりわけ芸北神楽の商品化の過程から，以下の 3 点をその特徴として指摘することができる。第一は，神楽が演じられる場所が各集落の神社から，所在地域（＝農村）の上演施設，都市の上演施設へと変化してきたことである。すなわち，本来の上演場所である神社や集落を離れて，神楽の上演される空間的範囲が拡大する状況がみてとれる。第二

3　2008 年から「ひろしま夜神楽」（旧日本銀行広島支店）が，2013 年から「広島神楽」定期公演（広島県民文化センター）と「実演！広島市内神楽団」（国民宿舎湯来ロッジ）が開催されている。

は，演者と主催者の分離が進んだことである。かつて神楽は氏子でもあり演者でもある農村集落の人びと自身のものであったが，商品化が進む過程で地元の商工業者や都市のメディア企業などによる振興の対象，あるいはそれらが活用するコンテンツへと変化した。第三は，新舞に象徴されるように，芸北神楽は観客向けに上演されるようになる過程で，その形式が神事性よりも娯楽性を重視するものに変化してきたことである。娯楽性を高めた芸北神楽が，観客からのまなざしに応えうるものとして，選択的に活用，消費されてきたのである。こうした上演空間の拡大と多様化，上演・運営主体の分離，表現形式における娯楽性の重視は，空間，担い手，形式の 3 点における芸北神楽の脱領域化の特徴とみることができる。

Ⅲ　奉納神楽鑑賞ツアーの試行

１．奉納神楽鑑賞ツアーの企画

Ⅱ章でみたように，広島神楽とりわけ芸北神楽の脱領域化が進む一方で，2010 年代に入ると，神楽門前湯治村や国民宿舎湯来ロッジで定期的に公演される神楽の鑑賞をプログラムに入れた旅行商品が企画，販売されるようになった。これらの商品は，神楽の上演（鑑賞）場所を神楽所在地域である農村に戻すという点で，広島神楽の再領域化をさらに進める試みと捉えることができる。しかし，神社でなく地域振興や集客を目的とする施設で上演されること，神楽団とは別の自治体や民間企業が運営主体であること，神事とは切り離したかたちで演目が選択，構成されていることからみて，この試みは商品化以前からの真正な神楽を鑑賞するものとはいえない。

そこで本研究では，商品化（＝脱領域化）以前の空間，担い手，形式の特徴を保持した神楽を鑑賞するツアー，すなわち農村集落の秋祭りで奉納される神楽を外部の者が鑑賞する行為を含む旅行を「奉納神楽鑑賞ツアー」と位置づけ，試行を通じて，その成立可能性と課題を検証することにした。すなわち，奉納神楽鑑賞ツアーというかたちでの，広島神楽の再領域化の可能性と課題を検証しようというものである。この企画の独自性は以下の 3 点にある。第一は，神楽本来の上演場所である農村集落の神社で神楽を鑑賞することである。第二は，各集落の神社の氏子が自ら運営し，また演じる神楽を鑑賞することである。第三は，奉納を主目的とした神楽をありのまま鑑賞することで，神楽の真正性を体験できることである。そうした各集落の真正な神楽を鑑賞するということは，集落や地域による舞や奏楽の違い，さらには各系統の特色など，地域的な多様性を理解することにもなる。

奉納神楽鑑賞ツアーの試行企画の概要は第 1 表に示したとおりである。2014 年 10 月から 11 月にかけて計 4 回，広島市等に居住する学生や研究者らが神楽の所在する農村地域を訪れ，秋祭りで奉納される神楽を鑑賞するとともに，当該市の他の観光施設等を訪問する 1 泊 2 日のツアーを企画，試行した。各回とも，奉納神楽を鑑賞するだけでなく，奉納神楽の準備作業を手伝ったり，神楽団員の直会（なおらい）[4] に参加したりするなど，集落の人びと，とりわけ神楽団員との交流をプログラムに組み込むことで，神楽やその所在地域に対する参加者の理解が深まるように工夫した。

第 1 回は，安芸十二神祇が継承される廿日市市Ａ地区を訪ね，秋祭りの準備作業を手伝った後に，約 7 時間の奉納神楽を鑑賞した。翌日には，廿日市市の主要観光地である宮島に渡り，厳島神社や千畳閣などの観光施設を訪れた。第 2 回は，芸予諸島の神楽が継承される呉市Ｂ地区を訪

4　団員どうしが飲食をともにしながら，神楽の舞や奏楽の内容を話し合ったり，相互の親睦を深めたりする集い。

第１表　奉納神楽鑑賞ツアーの試行内容

コース	期日	行程
廿日市（安芸十二神祇）	10/11（土）	県立広島大学（8：30）→Ａ神社（祭り準備）→ホテル（休憩）→Ａ神社（神楽鑑賞）→ホテル（24：30）
	10/12（日）	ホテル（9：00）→宮島（厳島神社・千畳閣など）→ JR 宮島口駅解散（15：00）
呉（芸予諸島神楽）	10/25（土）	県立広島大学（12:30）→Ｂ神社（祭り準備）→ホテル（休憩）→Ｂ神社（神楽鑑賞）→ホテル（24：30）
	10/26（日）	ホテル（9：00）→てつのくじら館→大和ミュージアム→ JR 呉駅解散（12：30）
三原（備後神楽）	11/ 2（日）	県立広島大学（12：30）→乗馬クラブ→Ｃ神社・当家（神楽鑑賞）→ホテル（25：00）
	11/ 3（祝）	ホテル（10：00）→まち歩き→昼食（タコ料理）→ JR 三原駅解散（12：30）
安芸高田（芸北神楽）	11/ 8（土）	県立広島大学（8:30）→Ｄ集会所（祭り準備）→競演大会同行→Ｄ集会所（直会）→ホテル（休憩）→Ｄ集会所（神楽鑑賞）→ホテル（27：00）
	11/ 9（日）	ホテル（10：00）→神楽門前湯治村→安芸高田歴史民俗資料館→郡山公園→県立広島大学（16：30）

資料：筆者作成.

ね，秋祭りの作業を手伝った後に，約 5 時間の奉納神楽を鑑賞した。翌日には，呉市の主要観光施設である大和ミュージアム等を訪れた。第 3 回は，備後神楽が継承される三原市Ｃ地区を訪ね，近隣の施設で乗馬を体験した後，約 5 時間の奉納神楽を鑑賞した。翌日には，ボランティアガイドの案内で三原城跡を散策した後，三原名物のタコ料理を味わった。第 4 回は，芸北神楽が継承される安芸高田市Ｄ地区を訪ね，秋祭りの準備作業を手伝ったり，競演大会への出演に同行したり，神楽団員の直会に参加したりした後，約 7 時間の奉納神楽を鑑賞した。翌日には，神楽門前湯治村と郡山城跡，歴史民俗資料館などの観光施設を訪ねた。

２．奉納神楽鑑賞ツアーの試行結果

１）安芸十二神祇（廿日市市）

江戸時代後期から湯立舞や安芸十二神祇を継承してきたＡ地区の神楽は，第二次世界大戦後も GHQ の許可を得て活動を続けたが，1957 年頃に神楽団が解散し，活動を中止した。その後，1972 年に青年団員 12 名が発起して神楽団を再結成し，今日まで活動を継続している。現在，毎年 10 月第 2 日曜の地元神社への神楽奉納のほか，廿日市市主催イベント等へ出演している。また，同神楽団が演じる神託舞「天臺将軍」は，2012 年に広島県無形民族文化財に指定されるなど，高い文化的・学術的評価を得ている。

2014 年の奉納神楽では，10 月 11 日の 17 時頃から約 7 時間をかけて，「神おろし」から「天臺将軍」まで 18 演目が演じられた（第 2 図）。ほとんどの演目が伝統的な安芸十二神祇の形式であり，「大蛇」など出雲神楽の演目が一部に組み入れられる構成であった。演者は小学生から大人まで 20 名あまりで，Ａ地区に居住する者に加え，廿日市市中心部や広島市に他出するＡ地区の出身

第２図　安芸十二神祇（天臺将軍）
筆者撮影（2014 年 10 月 11 日）

者が務めていた[5]。

ツアー終了後の聞き取り調査によれば，Ａ神楽を鑑賞したツアー参加者のうち大学生４名は，Ａ神楽の伝統的な舞の形式やそこから感じ取れる神事性に対して高い評価を与えていた。しかし一方で，伝統的な形式を継承しており，観客を楽しませることを主眼においたものでないことから，彼らはいずれも舞や奏楽が単調で地味な印象を受けたと回答している。そのため，７時間もの長時間の鑑賞を退屈に感じたり，同じ姿勢を保つ必要から身体的な苦痛を感じたりする者もおり，そうした者は 17 番目に演じられた娯楽性の比較的高い「大蛇」と 18 番目（最後）に演じられた広島県無形民族文化財「天臺将軍」を鑑賞するだけでも良かったと感想を述べている。また，同日午前から奉納神楽の準備作業を手伝ったことについては，大学生全員が高く評価している。具体的に，「農村コミュニティの実態を知ることができた」や「集落の人びとと親しくなれた」，「神楽について説明を受けたので，内容を理解した上で神楽を鑑賞することができた」といった感想を述べている。

彼らに試行内容を旅行商品として企画，販売することについて尋ねたところ，全員が商品化の可能性はあるとみて，その際，神楽団員等地域住民との交流が魅力になりうると回答した。ただし，神楽自体の娯楽性が高いとはいえないことから，神楽のストーリー等を予備知識として事前に得て神楽の内容を理解できるようにしておくこと，鑑賞時間を短くすることが必要だと指摘した。翌日の宮島観光については，宮島が廿日市市観光のメインであり，また実際の訪問が楽しかったことから，試行内容どおりでよいと回答した。

２）芸予諸島の神楽（呉市）

江戸時代後期に愛媛県大三島から伝わったとされるＢ地区の神楽は，Ｂ地区の自治会が継承し，毎年 10 月末に行われるＢ神社の秋祭りで奉納されている。この神楽は，舞場を清めて神を勧請する儀式舞と，神々とともに楽しむ形式舞の二つで構成される。前者は御幣をもって優雅に，後者は鎧をつけた舞手が剣や弓などをもって力強く舞うことを特徴とする。

第３図　芸予諸島の神楽
筆者撮影（2014 年 10 月 25 日）

2014 年の奉納神楽では，10 月 25 日の 18 時頃から約５時間をかけて，「神歌」から「四天（地ばやし）」まで７演目が演じられた（第３図）。演者は小学生から大人まで約 20 名で，Ｂ地区に居住する者に加え，呉市中心部や広島市に他出するＢ地

5　Ａ神楽団員への聞き取り調査（2014 年 10 月 11 日）による。

区の出身者が務めていた[6]。

ツアー終了後の聞き取り調査によれば，4 名の参加者（大学生 3 名，研究者 1 名）はいずれも，芸予諸島の神楽から伝統性や神事性を感じる以上に，自治会が祭りを運営し，神楽を上演するという運営方式に強い関心を示した。すなわち，伝統文化としての神楽を鑑賞するというよりも，神楽の演じられる，住民による手づくり感あふれる祭りを住民とともに楽しむということに魅力を見出していた。住民とともに祭りの準備や片付けの作業を行ったり，奉納神楽終了後の直会に参加したりしたことも，ツアー参加者にそのような感想を抱かせたと考えられる。

翌日の呉市主要観光施設の訪問については，施設自体は興味深いものではあるが，芸予諸島の神楽，それに関連する水軍の歴史についてさらに深く学べる機会があれば良かったという回答が多くみられた。また，住民との交流に魅力を強く感じた者からは，奉納神楽の翌日に行われる秋祭りにも参加したり，住民の家に民泊させてもらい，さらに交流を深めたりすることも希望していた。

３）備後神楽（三原市）

三原市大和町では 1960 年代後半に，備後神楽を継承するための保存会が結成され，その後，大和町内に次々と保存会が結成された。1989 年には 6 つの保存会が大和町連合神楽保存会を組織し，協力して技術向上と伝統文化の継承に努めている。2014 年現在 4 つの神楽保存会があり，所在集落や近隣地域の秋祭りなどで神楽を上演している。Ｃ地区にあるＣ神楽保存会もその一つであり，毎年 11 月に地元神社で神楽を奉納するほか，三原市中心部で開催されるイベントなどで神楽を上演している。

備後神楽は，古くから継承されてきた能舞を多く残すとともに，歌や語り（漫談）を楽しむ神楽もあり，保存会メンバーは後者の特徴をとらえて備後神楽を「口上神楽」と位置付けている。またＣ地区では，秋祭りで奉納される神楽は，Ｃ八幡神社と当番氏子（以下，当家）の自宅の 2 カ所で上演されることに特徴がある[7]。試行ツアーで訪れた 11 月 2 日にも，17 時頃から 30 分あまりＣ八幡神社で神楽が奉納された後，18 時頃から約 6 時間をかけて，当家にて能舞や歌，語りなどで構成される神楽が上演された（第 4 図）。

第 4 図　備後神楽（語り）

筆者撮影（2014 年 11 月 2 日）

ツアー終了後の参加者への聞き取り調査によれば，参加者は一様に，儀式的な能舞よりも，ユーモアがあふれ，娯楽性の高い歌や語り（漫談）に高い評価を与える結果となった。「派手な衣装と激しい舞の芸北神楽を見慣れているが，歌や語りのある備後神楽を見るのは新鮮だった」というように，広島神楽の多様性を実感したことがうかがえる感想も得られた。こうした感想や意見は，広島の多様な神楽を知り，体験する機会を提

6　Ｂ自治会会長への聞き取り調査（2014 年 10 月 25 日）による。
7　Ｃ地区は世帯数等に応じて 2 つの区に分けられ，隔年で各区選出の氏子が当家となり，神楽上演会場を引き受ける。近年は，世帯主の高齢化，世帯人員の減少，それにともなう引受負担の敬遠から，当家を積極的に引き受けようという氏子が少なくなっているという（Ｃ地区住民からの聞き取り調査（2014 年 11 月 2 日）による）。

供することが有意義であり，それを目的としたツアー商品の成立する可能性があることを示しているといえよう。

しかし，廿日市市や呉市のケースと異なり，ツアー参加者が祭りの準備や片付けの作業を行ったり，地区住民と交流したりする機会がなかったことから，廿日市市や呉市の試行ツアーにも参加した者からは，そうした交流機会の不足を残念がる意見も出された。また，廿日市市や呉市と異なり，神楽の上演場所が民家であったことも，外部の者であるツアー参加者が，祭りに参加し，住民と交流するための「敷居」を高めたと推察される。このことは，住民主体の秋祭りに，外部の者が参加する，あるいはかかわっていく際の課題を示しているといえよう。

４）芸北神楽（安芸高田市）

江戸時代に島根県石見地方から伝わってきたといわれるＤ地区の神楽は，舞や奏楽の中に石見神楽の古い形を残しており，演目「神降し」は 1954 年にいち早く広島県無形民俗文化財の指定を受けている。それを継承するのがＤ神楽団であり，同地区の住民と同地区出身の県内他出者，神楽に興味を持ち新たに入団した他地域の若者など約 20 名が組織している[8]。第二次世界大戦後に創作された新舞だけでなく，戦前からの旧舞も現在まで継承しており，それらを同地区の秋祭りで奉納したり，各地の共演・競演大会で上演したりしている。Ｄ地区の秋祭りでの神楽上演は，神社ではなく，国の補助金も活用して整備された集会所で毎年 11 月上旬に行われる。この集会所には交流スペースや図書室，厨房のほかに舞台と客席（座敷）を備えた神楽上演スペースがあり，そこで行われる秋祭りの神楽上演には地区住民や他地区の神楽愛好者などが訪れ，飲食や会話を楽しみながら，神楽を鑑賞している。

試行ツアーで訪れた 11 月 8 日には，Ｄ神楽団は午前中に安芸高田市に西接する北広島町で開催された競演大会に出演した後，集会所に戻って簡単な直会を行い，さらに 19 時頃から約 7 時間をかけて，秋祭りの神楽奉納を行った。9 名のツアー参加者は，同日午前からＤ神楽団に同行し，競演大会の見学，直会への参加，奉納神楽準備作業の手伝い，奉納神楽の鑑賞を行った（第 5 図）。

第５図　芸北神楽

筆者撮影（2014 年 11 月 8 日）

ツアー終了後の参加者への聞き取り調査によれば，娯楽性の高い芸北神楽を現地で楽しめたことに加え，奉納神楽の鑑賞だけでなく競演大会の見学，直会への参加，準備作業の手伝い，さらに翌日の神楽門前湯治村への訪問など，神楽とさまざまなかたちで関わり，神楽に対する理解を深めることができたことに対して，おおむね高い評価が得られた。また，神楽専用の上演スペースのある集会所での鑑賞は，屋外の神社や民家での鑑賞と比べて快適性が高いとの評価が得られた。

しかし一方で，プログラム数が多く，神楽鑑賞も深夜（午前 2 時頃）に及ぶなどハードな旅程であったこと，宿泊施設や入浴施設のアメニティが都市住民を満足させられるものでなかったことについては，改善の必要性が指摘された。また，直会への参加については，地域住民とのふれ

8　Ｄ神楽団への聞き取り調査（2014 年 11 月 8 日）による。

あいに高い評価が得られた反面，住民どうしのパーソナルな（遠慮のない）やりとりに，インパーソナルな（合理的，部分的な）人間関係に慣れた都市住民が驚き，尻込みするという状況も垣間みられた。

以上から，試行内容を旅行商品として企画，販売する可能性については，芸北神楽の娯楽性の高さ，鑑賞施設の充実，住民交流機会の提供などからみて，十分にあると考えられる。ただし，旅行者の高い満足度を得るためには，無理のないスケジュール設定，宿泊・入浴施設等のアメニティ向上，旅行者と住民の双方に心地よい交流方法の確立が必要だといえる。

Ⅳ　奉納神楽鑑賞ツアーの成立可能性

Ⅲ章でみたように，本研究において 4 回にわたり試行した奉納神楽鑑賞ツアーは参加者にはおおむね好評であり，今後，そうした旅行ニーズを喚起できる可能性があると考えられる。神楽鑑賞については，長時間に及ぶ奉納神楽の鑑賞時間を再考する必要はあるものの，娯楽性の高い芸北神楽のみならず，古くからの形式を受け継ぐ安芸十二神祇や芸予諸島の神楽，歌と語りに特徴のある備後神楽など，真正かつ多様な神楽を鑑賞できたことは，参加者にとって新たな発見であり，一定の評価がなされたといえよう。また，奉納神楽の準備作業や直会を通じた地域住民との交流もツアー参加者に好評であり，これらをプログラムに入れることで，商品価値が高まると考えられる。

他方で，ツアー参加者を受け入れた地域住民への聞き取り調査によれば，人口が急速に減少し，奉納神楽の鑑賞者が固定化，減少する各集落の現状において，外部の者が秋祭りでの奉納神楽を鑑賞することは，観客数の増加および新たな観客の獲得により，神楽団員の上演意欲の向上につながるとの回答が得られた。また，外部の者との交流はマンネリ化傾向にある秋祭りに新たな刺激をもたらすものであり，準備や片付けの作業を手伝ってもらうことは各集落における秋祭りの担い手不足を補うことができるとして，継続的な参加・協力を求める意見も出された。

以上から，本研究で試行した奉納神楽鑑賞ツアーは，旅行者にとっても受け入れた住民にとっても有意義だとみてよいと考えられる。その際，試行ツアーにおいて，旅行者が神楽自体はもとより神楽を演じる人びと，さらには神楽のある地域に関心を持ったという点に注目できる。また，受け入れた住民も，神楽が鑑賞，理解されたことはもとより，外部の者による地域への理解が深まったこと，秋祭りなど地域運営への支援を得たことを評価している点にも注目できる。すなわち，奉納神楽鑑賞ツアーの試行を通じてわかったことは，神楽を見る／見られるという関係性を構築するだけでなく，地域を理解する／理解される，あるいは，地域を支える／支えられる，という関係性を構築することへの関心が双方にあり，そうした内容をツアーに盛り込むことが有用だということである。言い換えれば，神楽自体を楽しむと同時に，神楽との多様なかかわりを通じて地域を理解し，地域を支えるきっかけとすることがツアーの魅力となりうると考えられる。

このようなツアーを企画するとすれば，次のような 3 つの顧客層とそれらに対応した企画の方向性が想定されよう[9]。第 1 に，地域振興施設や観光施設などでの神楽鑑賞を組み込んだ旅行に物足りなさを感じている顧客層である。秋祭りで奉納される真正な神楽を観光用に切り取り，アレンジした神楽を断片的に消費（鑑賞）するのでなく，真正な，そして多様な神楽を味わおうと

9　3 つの顧客層は，高崎義幸氏（NPO 法人広島神楽芸術研究所）の示唆をもとに，整理したものである。

いう人びとに適した企画だと考えられる。言い換えれば，地域振興施設や観光施設などで，入門編としての広島神楽を鑑賞，体験した人びとに，応用編としての奉納神楽鑑賞ツアーを提供しようという企画として位置づけられる。第 2 に，農村地域の住民との交流や共同作業に喜びを見出すことができる顧客層である。すなわち，真正な神楽を鑑賞するだけでなく，神楽にかかわる住民たちと情報や意見を交換・共有したり，秋祭りの運営をはじめ農村の諸活動を楽しみながら実践したりできる人びとに適した企画だと考えられる。第 3 に，地域にねざしたかたちで運営されているローカルな祭りに関心をもつ顧客層である。呉市での試行結果に顕著にみられたように，参加者は神楽自体だけでなく神楽のある祭りに強い関心を示しており，神楽自体に関心がなくともローカルな祭りに関心をもつ人びとを奉納神楽鑑賞ツアーの対象として想定することは可能だと考えられる。なお，これらの顧客層については，広島都市圏に居住する者だけでなく，日本国内の居住者，さらには日本の農村文化に関心をもつ外国人を想定することもできるだろう。

ただし，奉納神楽鑑賞ツアーの本格実施に向けては，試行ツアーの実施を通じて，いくつかの解決すべき課題があることも確認できた[10]。第 1 は，旅行者を受け入れる地域における住民合意の形成である。集落行事である秋祭りに外部の者が参加し，住民と交流することについて受入地域の住民が了解し，地域を挙げて受け入れる態勢を構築することが重要である[11]。第 2 は，各集落を訪問した時の旅行者の役割を明確にすることである。神楽鑑賞のみならず祭りの手伝い等を希望する旅行者に対して，受入地域の自治組織や神楽団が適度・適切な役割を与え，住民と旅行者が共同で祭りを作り上げる仕掛けを工夫することが期待される。第 3 は，旅行者が住民と交流したり，祭りの手伝いをしたりしようとする際，それを手助けしたり，留意事項を伝えたりする仲介役を確保することである。地域の実情や神楽の本質，旅行者のニーズを理解した者が，農村コミュニティに入ろうとする旅行者と住民の間の橋渡しをすることで，旅行者と住民が交流しない状態あるいは衝突を回避し，住民も旅行者も満足を得ることができるようにすることが求められる。

ところで，ツアー終了後に，本研究で実施した試行ツアーに対する支払容認額を参加者に尋ねたところ，10,000 円／人から 11,850 円／人までであった。これに対し，各ツアーで実際にかかった経費をみると，最も安い安芸高田コースで 14,091 円／人，最も高い三原コースは 22,360 円／人となり，いずれも支払容認額を超える結果となった。回答者に学生が多いために支払容認額が低めに抑えられるとともに，催行人数の増加やツアー運営の効率化によって一人当たり経費を下げられる可能性があるものの，各コースとも実際にかかった経費が支払容認額を上回っており，試行内容をそのまま旅行商品として販売しても採算がとれる可能性は低いと考えられる。そのため，奉納神楽鑑賞ツアーの本格実施に向けては，旅行代金だけで経費を賄い，利益をあげるのでなく，受入自治体等が一定の補助を行うなど，受入自治体等と旅行会社が連携したかたちで催行することが現実的だと考えられる。その際，受入自治体はツアー内容の社会的価値，すなわち郷土芸能の理解促進，都市農村交流の促進，地域運営の担い手確保などを認め，必要な支援を行うことが求められよう[12]。

---

10 これらの課題は，ツアー終了後に実施した評価検討会（2014 年 12 月 4 日，於．県立広島大学）で指摘，検討されたものである。

11 奉納神楽鑑賞ツアーは，氏子による祭りの運営に外部の者が参加するものであり，そのことが祭り自体の真正性を低下ないし喪失させる可能性があることも否定できない。この点については，別の機会に論じることを検討したい。

12 本研究結果を踏まえ，広島広域都市圏協議会“神楽”まち起こし協議会は，2015 年度から奉納神楽鑑賞ツアーの具体化に向けた検討を始めている。

第 2 表　試行ツアーへの支払容認額と実際の支出経費

コース	支払容認額（円）	実支出経費（円／人）
廿日市	11,250	17,849
呉	11,250	17,028
三原	11,850	22,360
安芸高田	10,000	14,091

資料：アンケート調査および県立広島大学資料

Ⅴ　おわりに

本研究は，広島県西部を例に，脱領域化が進みつつある神楽が，いかにして神事性や地域性を取り戻し，それによって神楽自体や所在地域の振興に結びつけること（再領域化）ができるのかという問題意識をもとに，農村集落の秋祭りで奉納される神楽を鑑賞するツアーを試行し，その実施可能性と具体化に向けた課題を検討したものである。

その結果，奉納神楽鑑賞ツアーは参加者におおむね好評であった。長時間に及ぶ奉納神楽の鑑賞時間を再考する必要はあるものの，広島県内の多様な神楽を現地で鑑賞できたことと，奉納神楽の準備作業や直会を通じた地域住民との交流には，参加者から一定の評価が得られた。また，地域（住民）にとって，新たな観客の獲得は神楽団員の上演意欲の向上につながるとともに，準備等作業を手伝ってもらうことで地域運営の担い手不足を補えるという効果が確認できた。以上から，奉納神楽鑑賞ツアーは，旅行者にとっても受入地域の住民にとっても，十分な意義を認めることができる。また試行結果からは，旅行者が神楽自体を楽しむと同時に，神楽との多様なかかわりを通じて地域を理解し，地域を支えるきっかけとなるような企画にすることが望ましいことがわかった。

ただし，本格実施に向けては，いくつかの留意点と解決すべき課題があることも確認できた。留意点として挙げられるのは，①旅行者を受け入れることに対する住民の合意形成，②各集落を訪問した旅行者の作業役割を明確にすること，③旅行者と地域住民の橋渡しをする仲介役の確保，の 3 つである。これらを通じて，旅行者と地域住民の円滑かつ有意義な交流を実現できると考えられる。課題としては，奉納神楽鑑賞ツアーは旅行代金だけでは採算がとりにくいことが予想されるため，民間事業者に商品開発・販売を委ねるだけでなく，受入地域の自治体等がその取組みの社会的意義を認め，企画・運営に積極的に関与することも必要だと考えられる。

以上の試行結果から，奉納神楽鑑賞ツアーは，脱領域化が進展する近年の広島神楽にあって，再領域化の一手段として有効な手段となりうることが確認できた。しかしながら，本調査結果のみをもって，奉納神楽鑑賞ツアーが受入地域振興の特効薬になるとは断言できない。神楽団のある地域，集落の多くは依然として少子化と若年者を中心とする人口の流出が続き，神楽のみならず地域運営の後継者確保に苦慮している実態がある。こうした地域の実態を詳細に把握，分析した上で，神楽と地域の継承，振興のあり方を引き続き検討することが必要である。これらの点については，今後の研究課題としたい。

謝　辞

本研究は県立広島大学平成 26 年度地域課題解決研究「広島神楽の再領域化に向けた実証研究」の成果の一部をとりまとめたものである。研究遂行にあたり，広島広域都市圏協議会“神楽”まち起こし協議会をはじめ，試行ツアー訪問先の神楽団や自治会の皆様には大変お世話になりました。記して感謝いたします。なお本稿の骨子は，日本地理学会 2015 年春季学術大会（2015 年 3 月 28 日，日本大学）で発表した。

文　献

大城直樹（1998）：現代沖縄の地域表象と言説状況．荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ－地理学的想像力の探求』古今書院，198-211.

澤　宗則（2010）：グローバル経済下のインドにおける空間の再編成－脱領域化と再領域化に着目して－．人文地理，62，132-153.

澤　宗則・南埜　猛（2006）：グローバル化にともなうインド農村の変容－バンガロール近郊農村の脱領域化と再領域化－．人文地理，58，125-144.

高崎義幸（2014）：郷土芸能による地域振興とその課題－広島県北広島町の神楽団実態調査から－．広島修大論集，55，91-104.

遠城明雄（1998）：都心地区の衰退と「まちづくり」活動をめぐって．荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ－地理学的想像力の探求』古今書院，212-225.

長澤壮平（2009）：「上演」にねざす地域伝統文化．社会学評論，59，566-582.

三村泰臣（2010）：『中国地方　民間神楽祭祀の研究』岩田書院.

八木康幸（1994）：ふるさとの太鼓－長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえ－．人文地理，46，581-603.

和田　崇（2015）：広島県西部における神楽の商品化と企業の役割．エリア山口，44，8-16.

ギデンズ，A．著，松尾精文・小幡正敏訳（1993）：『近代とはいかなる時代か？－モダニティの帰結－』而立書房.